

## 五積散料

### 1. 出典の考案：

中国出版の「中醫方劑大辭典」によると、本方の出典を『理傷續斷秘方』とするが、小曾戸洋が「処方名のいわれ」に、次のよう『理傷續斷秘方は唐（846年頃）の作と称されるものの、従来の中国の目録類に一切著録されなく、また内容からしても唐代の書と考えにくいので、その伝承は怪しい。……その収載は初版太平惠民和劑局方の「大觀原本」（北宋の大觀年間；1107~1110）にある。

五積散はそれ以前にも北宋の「蘇沈良方」や「博濟方」に記載されているが、ただ両書とも現伝本に書誌上の問題がある為、本方剤の出典を太平惠民和劑局方の「大觀原本」とされた方が妥当である。』と書いてある。

台北の故宮博物院の蔵書に、故宮所蔵明抄本の「蘇沈良方」があり、その記載の真評性はどこまで信じて良いか分からないが、それによると、五積散は1029年以前すでに出来たものと思わせる。

### 2. 五積の解釈：

- ①「五積」の積は病名で、「積聚（しゃくじゅ）」の積である。  
積は陰気の流滞で五臓に起因するもの、按じて動かないもの。  
聚は陽気の流滞で六腑に起因するもの、固定しないもの。  
積は五臓の別によると、肝積、心積、脾積、肺積、腎積になる。
- ②明の「醫學入門」（1575）では病名の別によって分類している。  
五積を気積、血積、痰積、寒積、食積と分類される。

### 3. 中国古典の内容：

蘇沈良方：（故宮所蔵明抄本）

【蘇：蘇軾（そしよく；1036~1101）；沈：沈括（しんかつ；1029~1093）】

五積方：（余家舊方博濟亦載、小有不同）

蒼朮二十兩、桔梗十兩、陳皮六兩、白芷三兩、甘草三兩、當歸二兩、川芎一兩半、芍藥、白茯苓、半夏湯七洗 各一兩、麻黃春夏二兩、秋冬三兩、乾薑春夏一兩半、秋冬二兩、肉桂春夏三兩、秋冬四兩、厚朴薑汁炙 二兩、枳殼麩炒去 四兩 以後三味別搗和、右前十五味為粗末、分作六服、大鍋内緩火炒、令微赤香熟、即不可過焦、取出以淨紙籍板床上涼令冷、入後三物和之和氣。

每服三錢加薑辣煎至六分、去滓服。

傷寒手足逆冷、虚汗不止、脉沈細、面青嘔逆加順元散一錢同煎熱服。

産婦陳疏難産、經三兩日不生胎死腹中、或産母氣乏委頓、産道乾澁加順元散七分酒三分煎、相繼兩服、氣血内和即産。胎死者不過當下其順元散多量。産母虚實傷寒發熱、脇内寒者加葱三寸豉七粒、同煎相繼兩三服、當以汗解。

順元散：烏頭二兩、附子炮、天南星炮 各一兩、木香半兩

右予叔祖錢氏時得此方、賣于民家、故吳中至今謂之沈氏五積散、大抵此散能温裏外、但内外感寒、脉遲細沈伏、手足冷、毛髮恟慄、傷寒裏證之類、大啜三兩杯、當手足温或汗乃愈。今世名醫多用此散治氣極効、和一切氣通血絡無出此藥。人病脾瘧、用紫金丸逐下、乃服此散、數服多愈。

太平惠民和劑局方：

卷之二 治傷寒附中暑

五積散：

調中順氣、除風冷、化痰飲。治脾胃宿冷、腹脇脹痛、胸膈停痰、嘔逆惡心，  
或外感風寒、內傷生冷、心腹痞悶、頭目昏痛、肩背拘急、肢體怠惰、寒熱往來、  
飲食不進，及婦人血氣不調、心腹撮痛、經候不勻、或閉不通、並宜服之。

陳橘皮去白、枳殼去，麩炒、麻黃去根，節 各陸兩，  
白芍藥、川芎、當歸去蘆，洗、甘草炙，剉、茯苓去皮、半夏湯洗七次、  
肉桂去粗皮、白芷 各參兩，厚朴去粗皮，薑製、乾薑炮 各肆兩，  
桔梗去蘆頭 拾貳兩，蒼朮米泔浸，淨洗，去皮 貳拾肆兩。

右除肉桂、枳殼外別為粗末外、壹拾參味同為粗末、慢火炒令色轉、攤冷、  
次入肉桂、枳殼末令勻。

每服參錢、水壹盞半、入生薑參片、煎至壹中盞、去滓、稍熱服。

如冷氣奔衝、心、脇、臍、腹、脹滿刺痛、反胃嘔吐、泄痢清穀、及痲癩癥瘕、  
膀胱小腸氣痛、即入煨生薑參片、鹽少許同煎。

如傷寒時疫、頭痛體疼、惡風發熱、項背強痛、入葱白參寸、豉七粒同煎。

若但覺惡寒、或身不甚熱、肢體拘急、或手足厥冷、即入炒茱萸七粒、鹽少許同煎。

如寒熱不調、欬嗽喘滿、入棗煎服。

婦人難產、入醋壹合同煎服之。並不拘時候。

病 因		効 能	治する症状
五	外感風寒	調 <u>中</u> 、順 <u>氣</u> 除 <u>風冷</u> 、化 <u>痰飲</u>	脾胃宿冷、飲食不進 腹脇脹痛、胸膈停痰 心腹痞悶、嘔逆惡心 寒熱往來、頭目昏痛 肩背拘急、肢體怠惰
	內傷生冷		
積	婦人血氣不調	氣積 血積	心腹撮痛 經候不勻、或閉不通 <u>氣</u>
太平惠民和劑局方の加減方：			
散	膀胱小腸氣痛	入煨生薑、鹽少許	
	傷寒時疫	入葱白、豉	
	惡寒 身不甚熱、肢體拘急 手足厥冷	入炒茱萸、鹽少許	
	寒熱不調 咳嗽喘滿	入 <u>棗</u>	
	婦人難產	入 <u>醋</u>	

萬病回春；中寒： (明，龔廷賢)

脈中寒緊澀。陰陽俱盛。法當無汗。有汗傷命。  
 中寒者。寒邪直入三陰經也。比傷寒尤甚。若不急治。死在旦夕。  
 寒中太陰者。則中脘疼痛也。寒中少陰者。則臍腹疼痛也。寒中厥陰者。則小腹疼痛也。  
 五積散：

「治中寒。及感冒寒邪。頭疼身痛。腰背拘急。惡寒嘔吐。腹痛。不問外感風寒。  
 內傷生冷。寒濕客於經絡。腰背酸疼。及婦人經脈不通並治。

白芷、當歸、川芎、陳皮、厚朴薑汁炒、蒼朮米泔浸、半夏薑製 各一錢，  
 白芍炒、枳殼麩炒、桔梗去蘆 各一錢，乾薑、官桂 各五分，麻黃 八分，甘草 三分，  
 右剉一劑。生薑三片。大棗一枚。水煎溫服。」

4. 構成内容および方劑の分析：

構成生薬の内容および分量の比較：

		蘇沈良方	和劑局方	萬病回春	北里 処方集	漢方 処方解説	ツムラ
当帰	四物湯	二兩	三兩	一錢	2.0	1.2	2.0
川芎		一兩半	三兩	一錢	1.0	1.2	1.0
芍薬		一兩	白芍薬三兩	白芍一錢	1.0	1.2	1.0
蒼朮	平 胃	二十兩	二十四兩	一錢	2.0	2.0	3.0
厚朴		二兩	四兩	一錢	1.0	1.2	1.0
陳皮	二 陳	六兩	陳橘皮六兩	一錢	2.0	2.0	2.0
甘草		三兩	三兩	三分	1.0	1.2	1.0
茯苓	散 湯	白茯苓一兩	三兩		2.0	2.0	2.0
半夏		一兩	三兩	一錢	2.0	2.0	2.0
枳 殼		四兩	六兩	一錢	1.0	1.2	枳実1.0
白 芷		十兩	十二兩	一錢	1.0	1.2	1.0
桔 梗		三兩	三兩	一錢	1.0	1.2	1.0
麻 黄		春夏二兩 秋冬三兩	六兩	八分	1.0	1.2	1.0
桂 皮		肉桂春夏三兩 秋冬四兩	肉桂三兩	官桂五分	1.0	1.2	1.0
乾 姜		春夏一兩半 秋冬二兩	四兩	五分	1.0	1.2	
生 姜		入生薑	入生薑	三片			1.0
大 棗				一枚	1.0	1.2	2.0
香附子						1.2	
白 朮					2.0	2.0	

1回分はなし

①玄治目附之書（岡本 玄治）

「此方……薬味を吟味するに平胃散、二陳湯、麻黄湯、四物湯、今一方は桂枝湯也。……  
平胃散は大抵湿気之薬也、二陳湯は痰之薬也、麻黄湯は寒気之薬也、四物湯は血薬なり。」  
「他流には夏之節五尺を用れば、麻黄を去也、様子にはよけども麻黄を去らば、五積の薬力弱くして本意に非ず。」

②方意弁義（岡本 一抱）

「此方……二陳湯、四物湯、平胃散。是三方に本づきて。組立たり。……平胃散ある故に。食の滞るによし。四物湯の中を。地黄を去て用ゆる故に。血虚に宜し。二陳湯ある故に。痰によし。肉桂と乾姜とを組合する故に。寒に宜し。白芷、麻黄ある故に。氣に宜し。」  
「腰背は。太陽經の主とる所なり。少陰腎と表裏なる故なり。  
方中に麻黄を入るは。是意なり。麻黄は太陽の薬なり。故に腰背痛によし。」  
「とかく寒湿に感じ、經絡に。客たるに用ゆ。麻黄一味要薬なり。如何んとなれば。麻黄を入る故に。經絡へ行なり。」

③方彙口訣（浅井 貞庵）

「此の方は高名な薬にて、種々の薬味を交ぜたる者なれとも、大分に善く組み合たる薬也。  
……桂、麻は外の薬、乾姜は中の薬、當、芎、芍は血分、陳、朴、蒼は氣分也。故に内外両方へ効あり。風寒一切に用るで。其の功が廣きぞ。……干は腸中の陽、麻は腠理の陽、桂は血脉の陽、當、芎、芍で血分、芷、桔、枳で氣分、陳、蒼、朴で脾胃と箇様に組たる者也。古へに薬有七情と云句が有る。……此の七情の意味が知れざる也。是で血薬幾味、脾胃が何ん味、氣分は幾味、上中下へ往くは幾味と見る。……枳、桔、芷、蒼は上部、半、茯苓、朴は中部、當、芎、桂、干は下部と右の如く、其の親み馴染む処の功用が有るぞ。」

処方構成の上より論じると、方中に多くの方意が含まれている。

- (1)平胃散
- (2)二陳湯
- (3)四物湯去地黄
- (4)小半夏加茯苓湯
- (5)半夏厚朴湯去蘇葉
- (6)苓姜朮甘湯
- (7)苓桂朮甘湯
- (8)苓桂甘棗湯
- (9)桂枝湯
- (10)麻黄湯去杏仁
- (11)桂麻各半湯去杏仁
- (12)小青竜湯去五味子、細辛
- (13)葛根湯去葛根
- (14)続命湯去人參、杏仁、石膏
- (15)当帰芍薬散去沢瀉
- (16)小承気湯去大黄
- (17)桔梗湯

『中医処方解説』によると、五積散は以上のように複雑な薬物構成になっているので、常に処方通りに用いるべきではなく、当面の症状に応じた加減を行うのがよい。

表証が強く無汗・悪寒・関節痛があきらかであれば肉桂を桂枝にかえ、表証がなければ麻黄・白芷を減らすか除く。腹部の冷えや悪心・嘔吐がつよければ呉茱萸を加える。月経痛には麻黄・白芷を除き、香附子・延胡索などを加える。四肢の冷えや痛みが強ければ附子を配合する。

衆方規矩に記載された五積散の加減 (曲直瀬 道三)

構成：蒼朮、桔梗、麻黄、枳殼、陳皮、厚朴、乾姜、當歸、川芎、芍薬、白芷、桂皮、半夏、茯苓、(生姜、葱白)；計十四味。

		加	味	減味	適応症：
諸 症 状 に 対 す る 加 減		寒に犯される	煨乾姜		<p>此の方は夏至より麻黄を去る。此の薬、寒湿をのぞく、故に痛ある者のに必ず用ゆ。</p> <p>○頭痛み、臂痛み、腹痛み、腰痛み、脚氣の痛風などに皆發熱ありて、足の冷る時は此の湯を與えて可なり。</p> <p>○寒氣、脾腎肝の三陰の經にとどこおりて、四肢節々の痛むに與えて、奇妙の効あり。</p> <p>○腹痛久してやまず増も減もせず、寒に因る者には宜く治す。</p> <p>○風寒湿に感じて、臂膊痛み、或は総身しびれる者にこれを用ゆ。</p> <p>○ころびて、身を打、或は人にたたかれて、血とどこおり、其の所冷え痛むには立どころに効をとる。</p> <p>○冬月、腰たたず、上氣して面あかく、また腰より下冷ゆること氷の如く、顔火の如く熱し、背は寒をにくむにも亦た宜し。</p> <p>○婦人の身冷えて、經水來ざる者にも可なり。</p> <p>○新産のあとに此薬を以て敗血を除て、新血を生すべし、寒熱の患もなきものには麻黄を去る。</p> <p>○手足の湿にてしびれるには烏薬順氣散を合す。</p>
		氣をはさむ；寒疝	呉茱萸		
		氣滯による腹筋のはり	青皮		
		総身の疼み	乳香、没薬、細辛		
		風 痺	羌活、独活、防風		
		腰 痛	桃仁、茴香		
		手足のひきつり	檳榔子、木瓜、牛膝		
		咳 嗽	杏仁、桑白皮		
			杏仁、五味子		
	寒 濕 に 感 じ 風		腰痛、脾胃の氣がとじ	桃 仁	
		腎經を傷り、腰痛 俛仰できず	乾姜、桃仁		
		經絡にくぐり、 脚膝の腫れ痛み	木 瓜、牛 膝 檳榔子、呉茱萸		
		臂膊痛、総身しびれ 四肢骨節痛	羌活、独活、穿山甲		
	泄 瀉	肉豆蔻、白朮	枳殼		
	疝 氣： 小腹より痛み、腰胯の下 につらなり、心さき痛み 額の上に汗出	延胡索			
	足のむくみ	五加皮、大腹皮			
	熱	黄 芩			
婦		月經の調節、産の催生	艾葉、醋		
		月經時：身痛、手足の しびれ、頭痛、めまい	羌活、独活、牛膝 生姜、大棗	乾姜	
		虚寒による赤白帯下	呉茱萸、香附子		
	呉茱萸、香附子、茴香				
人		淋 病	車前子、木通		
		難 産	麝香、肉桂		
		寒い時節の難産	附 子		
		死 胎	乾姜、附子		

## 5. 日本医師会医薬品カード：

### ●使用目標：

本方は体力中等度の人を中心に比較的幅広く用いられる。寒冷や湿気に侵されて、下腹部痛、腰痛、四肢の筋肉あるいは関節の痛みなどを訴える場合に用いる。この場合しばしば下半身の冷えと上半身ののぼせ、頭痛、項背のこり、悪寒、悪心、嘔吐などを伴うこともある。婦人では月経不順や月経困難などを伴うことが多い。

### ●適応症：

上記の使用目標に従って、次の諸疾患に適用される。

腰痛、下腹部痛、神経痛（とくに坐骨神経痛）、筋肉痛、関節痛

その他、慢性関節リウマチ、月経困難症、月経不順、感冒、胃腸炎、更年期障害などに用いられることがある。

中寒  
中湿

### ●鑑別を要する主な処方：

当帰四逆加呉茱萸生姜湯、当帰芍薬散、桂枝加朮附湯、八味地黄丸

矢數道明に曰く、「此の方を用いる目標としては、体質的には脾胃の虚、即ち胃腸の弱い者が、寒と湿のためにいろいろの病状を呈したときに広く応用されるものである。もっと具体的にいうと、患者の顔色はやや貧血気味で、下半身特に腰、股、下腹、下肢等が冷えて痛み、脈は大体に沈の方で、腹は多くは軟弱である。ときに心下部の堅く張っていることもある。……この処方を用いる病態ともいべきものは、漢方的にいて、肝と脾の虚が本で、現象としての気、血、痰、寒、食の五積を治すというのである。肝と脾が弱いため体内にこれら五つの病毒が鬱滞して、諸症状を起こしているのを治す。」

## 6. 五積散の証：

①舌証：湿潤、殆ど無苔、時には微白苔である。（矢數道明）

②脈証：沈遅であることが多い、甚だしく微弱ではない。（矢數道明）

中寒のときは沈遅、または緊を表す。中湿の甚だしい場合は滑を呈す。（矢數 格）

③腹証：大体に於いて心下痞鞭、或いは痞満がある。（矢數道明）

心下痞満で、板のような抵抗を触れることがある。また、腹は一体に膨脹していることがある。この膨満の程度の進んだものが腹膜炎となることもある。（矢數 格）

④正証を持っている者は、顔色が青白色で、皮膚のつやが何となく無い感じの者である。（矢數 格；1893～1966, 73才）

聖光園細野診療所は、著効を示した症例を検討し、特有のパターンが見られると報告した。

①腹証：心下部の中脘穴付近、両臍傍にかけて、抵抗と圧痛を認めることが多い。両臍傍は  
按压すると必ず強い痛みを自覚する。腹部全体としては、ぼっちらりと脹った感じが  
あり、かといって、ガスや水による緊満した状態ではない。

②脈証：特徴的で、一定の脈状はないが、一般に沈脈の傾向が強いようである。

## 7. 先哲らの記載と口訣：

### ①『医方口訣集』（長沢 道寿）

「治寒之法、不可不知、……

如寒邪犯太陰脾、則腹滿而中脘痛、或自利不渴或嘔而噦乾、藿香正氣散多加乾薑。虚者、理中湯、寒甚、加附子。

如犯少陰腎、則臍腹疼痛、或口燥舌難動、五積散加吳茱萸。虚寒甚、則附子湯。

如犯厥陰肝經、則小腹、至陰疼痛、囊縮、用當歸四逆湯。甚者、乾薑附子湯。

至於指甲口唇皆青、舌卷、脈伏絶者；尤當大劑、薑附温之。」

### ②『玄治方考』（岡本 玄治）

「口傳云有用虚勞之証、縱雖為汗出勞証、飲食如常、下焦衰人用此方、否則不用、二之字眼也。」

### ③『方意弁義』（岡本 一抱）

「さて此十五味の内。君臣佐使あり。丹溪は。蒼朮を君藥とし。枳殼、厚朴を。佐使とし。

……畢竟君臣佐使は。臨機應變にて。分つべし。たとえば五積散を用ゆべき病人

あるに。皮膚乾て羸瘦する時は。當歸、川芎、芍藥を大に入。君藥とす。半夏、厚朴、蒼朮を。小に入。是臣なり。又皮膚も不乾中焦につかえ在て。腹脹は。蒼朮、厚朴、半夏を大に入れて。君とし。當歸、芍藥、川芎を。小に入て。臣とす。

又痰あらば。陳皮、半夏、茯苓を。大にし。君藥とす。

如此四物湯、二陳湯、平胃散の分は。病に因て。君臣佐使を分つなり。」

### ④『牛山方考』（香月 牛山）

「此方修合して、其ま用るを生料五積散と云。肉桂、白芷の火を忌む二味を除き、外十三味慢火にて炒用るを熟料五積散と云。熟料は虚寒を治する便なり、生料は風濕を治する也。」

### ⑤『牛山活套』（香月 牛山）

「中寒の症、五積散、理中湯の類を用て、汗出、寒熱やみて後に體憊し、脈微細なる時は、

六君子湯に當皈、炮姜を加え、或は肉桂少計を加て調理すべし、虚甚き者には、補中益氣湯に炮姜、肉桂を加て用べし、或は異功散に當皈、炮姜を加るも佳也。」

### ⑥『提耳談』（北尾 春圃）

「中寒の症は、冬月内外ともに寒にあてられて、内外ともに寒する也。

輕きは五積散、重きは附子理中湯、甚則參附湯。」

### ⑦『療治經驗筆記』（津田 玄仙）

「此方を用ゆる目的は、腰冷痛、腰股攣急、上熱下冷、小腹痛、此四症の目的に用ゆる也。

△腰股攣急は腰より股へかけて筋はるを云なり。右の四症は五積正面の目的なり。

△上熱下冷は足冷るを重にとるべし、上熱は有ても無くてもよし。

△腰冷痛は冷の字に心を付べし、苦熱するは効なし。……

△此方を用ゆる心得、凡そ諸病寒湿に中る、病人が皆此方用てよしと知るべし。」

### ⑧『勿誤藥室方函口訣』（浅田 宗伯）

「此方は軒岐救正論に、氣血飲食痰を五積と云ることあり、即此意にて名くと見ゆ。

故に風寒を驅散し發表するの、外に内を温め、血を和するの意あれば、風寒濕の氣に感じ、

表症もあり、内には從來の疝積ありて、臍腹疼痛する者尤效あり。先哲此方を用る目的は、腰冷痛、腰腹攣急、上熱下冷、小腹痛の四症なり、其他諸病に效あること、宋以來俗人も

知る藥にして亦輕蔑すべからず。」

●産婦人科分野：

◎帯下：虚寒に属するものに用いる。

①『衆方規矩』（曲直瀬 道三）

△「帯下に赤白をおろして、虚寒に属するには、香附子、茴香、呉茱萸を加う。」

△「赤白帯下、虚寒に属するは痛みあり、呉茱萸、香附子を加う。」

②『玄治目附之書』（岡本 玄治）

△「赤白帯下、虚寒の者、肚腹腰など痛、或は一身びくびくと痛には、此方呉茱萸、香附子を加用也。」

③『牛山方考』（香月 牛山）

△「婦人、赤白帯下、虚寒に属する者、疼甚き者、呉茱萸、莎草を加て奇効あり。」

④『当莊庵家方口解』（北尾 春圃）

△「冷症の帯下にもよし、是を用て不効、却て多は湿熱あり。」

⑤『療治経験筆記』（津田 玄仙）

△「婦人赤下、虚寒に属し、足冷るもの此方効あり。」

◎催生を目的：難産、死産、過期産、早く生ませたい時、墮胎で苦しむ時に用いられる。

①『衆方規矩』（曲直瀬 道三）

△「婦人の月水を調べ、産の催生には艾葉、醋を加う。」

△「難産には麝香、肉桂を加う。」

△「難産、腰腹甚だ痛み、時節寒天ならば、附子を加て妙を得たり、又難産、腰腹いたみ、破水くだりても産せざること、二夜なるも亦効を得たり。」

△「死胎、腹いたみ、……乾姜、附子を加う。」

②『玄治方考』（岡本 玄治）

△「婦人調經催産加艾、醋。」

△「難産加射香、交桂。」

③『玄治目附之書』（岡本 玄治）

△「既に産せんとして腹痛し、腰甚痛に此方を用也。」

△「第一難産に用なり。死胎には此方に生蒲黄、牛膝をたっぷり加用也。」

△「寒き時分難産にて、裡を経て生かぬる時此方に附子を加用なり。」

△「安産の催生に用る時は、破水不下、先には不用也。」

△「名譽の催生⇒五積散加杏仁、木香」

△「催生五積散⇒五積散加杏仁、木香、阿膠」

④『牛山方考』（香月 牛山）

△「難産、腰腹甚痛み、冬寒の時ならば、附子を加て奇効あり。」

△「破水下りても、腰腹痛甚者には此方を用べし。川芎、當皈を倍加して、効あり、經宿も亦安きことを得也。破水已に下て、腰腹不痛者は氣虚也、此方を用ゆべからず、安胎紫蘇飲、或は補中益氣湯に加減して奇効あり。」

⑤『当莊庵家方口解』（北尾 春圃）

△「死胎不下にも用るぞ、去麻黄加肉桂、加附子てよし。」

⑥『療治経験筆記』（津田 玄仙）

△「死胎を下すには干姜、附子を加、二貼而立下。」

⑦『百方口訣集』（津田 玄仙）

△「難産催生口傳之問：本方加射香、附子、死胎亦有効。」

△「産道乾枯難産之問：：或破水二三日不産者、皆本方最宜推下。本方杏仁、木香、生姜、大棗、百草霜一錢を加服、未經破水者禁服。」

△「死胎加味之問：破水二三日産道乾渋、可本方去麻黄加川烏、附子、天南星、阿膠、木香、杏仁。」

⑧『餐英館療治雜話』（目黒 道琢）

△「友松子曰、此方古来有催生五積之名、胎婦産道乾枯、或破水出、而二三日不産者、本方最宜推下。若胎児已死者、亦隨而墜下云。」

8. 先哲、大家らの治験例：

①曲直瀬玄朔；（1549~1631，83才）：

△「山田忠兵衛、壯歳、感寒憎寒、足冷、五六日不止、今泄瀉、五積散去枳殼。」

△「藤堂佐土守、五十余、普請、入水而后悪寒、咽痛、大便瀉、脉弦、五積散去枳殼。」

②長沢道寿；『道寿先生医案集』（~1637，？才）：

△「此寒毒入胃；一男子、六月飲水食瓜果過多、腹痛嘔吐、小腹腰股甚痛、足冷、脉沈遲、一方：生料五積散。」

△「此寒邪塞血脉；一男子、冬月犯冷食、腹痛吐瀉、手足却煩熱、頭痛項強、腰背供攣急、一方：生料五積散。」

△「此寒氣中經絡也；一男子、因感寒、兩手麻木、口眼喎斜如中風、一方：五積散。」

△「此脾胃感寒而血氣閉塞也；一婦人、因食冷物、腹痛吐逆、悪寒、頭重、項筋強直、脉弦遲、一方：生料五積散。」

△「此寒湿邪入陰經也；一男子、因臥湿地、悪寒、腰痛、手足攣急如傷寒、一方：生料五積散。」

△「此寒邪入陰囊；一男子、感寒、兩手麻木、兩足筋攣、陰丸縮急、小腹隱々痛、面色青黒、一方加一：生料五積散加奪（）。」

③北尾春圃；『提耳談』（1658~1741，83才）：

△中濕：「女子年十三、脉遲無力、右手動揺、足亦揺、沓風、或跨倒仆、痿症之類也。

右手もじもじして左手遊する様也。幼女無中風之症、是因濕發也。

滲濕湯數貼而安、以後五積散去麻黄加羌活而愈。」

△瘰癧病：「熱病を患る者、兩人振舞に行、大食して、翌日一身瘰不能起、大便も仰て臥なから通ず、冬のこと也。予二十四五歳の時、用五積散、兩人とも二三四貼にして瘰。」

④津田玄仙；『百方口訣集』（1737~1809，73才）：

△「卒口唇痿緩問：一老人卒口唇痿緩、唾涎自流、足冷、此非真中、是寒湿緩筋也。本方全治。」

△「攣拳手足如柴：一人二三年以來、手足攣拳而不伸、瘦細如柴、是寒湿也。本方にて治したり。」

△「一身刺瘦步行難遂之間：一僧歳壯、感寒湿、一身削瘦、腹堅、尿渋、行歩難遂、脉細数、本方にて治たり。」

⑤華岡青洲；（1760~1835，76才）：治腰痛

△腰痛：「泉州、父、鬼村惣治郎、娘、行年十六歳、九月中旬卒然として腰痛を發し、乞治愚生行て、按るに無腫氣、皮色不変、熱勢なく、食氣如常、唯轉倒すること不能、依て、其痛打撲の如し、故先主方越加朮烏加牛膝十五貼を投じ、大玄を貼すれとも寸効なし。故に右の証を師に告る、師曰如此の症、予治療すること四五人、至而希なる証也。此は即寒湿骨節に入て發する証也。主方五積散に桃仁、茴香與て間々効ありと云云、即其方十五貼を投じ、兼るに雲母煎を以て煎じ忽全治せり。」

⑥百々漢陰；『漢陰臆乗』（1773~1839，67才）：治膀胱小腸氣痛

△「一男子、年拾五、始め心腹痛を患い、日を経て大勢は略解し、臍傍に一塊あり、大きき茶碗の如し、皮上に漫起し、時あつて浮、沈す。此を按ずに軟かにして實に塊あるにも非ず、予以て疝なりとして、此方を用いて、立どころに消散して愈、矢張り、方後に云、膀胱小腸氣痛の類とみゆ。」

△「一婦人、初春夜航にて浪華に赴き、劇を視る、數日滯留して、また夜航にて京に歸り、其日より右脇下偏痛堪難り、腫塊ありて、大きき碗の如し、晝夜疼痛叫苦、諸巴豆等の藥を服して効なし。此方を處して、數帖にして速かに消散せり、矢張寒氣にて、疝を動かせ也ものと見ゆ記し置べし。」

⑦山田業精；『井見集附録』（1850~1907，58才）：

- △五積散加薏苡仁、桃仁；治疣痔
- △五積散合麻杏甘湯；治疣痔
- △五積散加薏苡仁、桃仁；治腸癰
- △五積散；治泄瀉
- △五積散；治水腫
- △五積散加大棗；治咳嗽
- △五積散加杏仁、桑白皮；治咳嗽
- △五積散加羌活；治腰脚疼痛麻痺
- △五積散加羌活、獨活；治歷節
- △五積散加菊花、羌活；治前額痛

⑧矢數道明；：

- △五積散；治心臟喘息ならびに心臟弁膜症
- △五積散；治胃痙攣およびその他の腹痛
- △五積散；治胃下垂
- △五積散加木香；治胃拡張・胃酸過多症
- △五積散；治二十五年来の肋間神経痛
- △五積散；治手足の振えと膝の痛み
- △五積散；治老人の腰痛
- △五積散加牛膝；治梅雨期腰痛
- △五積散；治老人の頑強な腰痛
- △五積散；治腰痛・腹痛・臀部痛
- △五積散；治腰痛・冷え症・羞明
- △五積散；治無汗症
- △五積散；治噁気頻発症
- △五積散加附子；治腰椎分離症

9. 先哲らが述べた鑑別処方：

①岡本玄治（1587~1645，59才）：

補中治湿湯：「五積散の証は、氣血少而感寒湿也。是補中治湿湯可也、然とも寒湿。一身削瘦と云からは五積散也。行歩難遂に尤可也。尿渋は湿氣が滯ての故なり、是が目付ぞ。」

大防風湯：「感寒湿は、五積散也、此藥にて行歩未遂は大防風湯可也。」

三和散：「氣滯りて、一身の筋も引つり縮て五積散之症の如く痛ことも有、是には必ず三和散を用也。」

正氣天香湯：「産后悪血之滯り、心へ攻上るに用ことも、正氣天香湯を用ることも有り。」

②津田玄仙（1737~1809，73才）：

正氣天香湯、紫蘇和氣飲：「産后餘血攻心之間：産後餘血攻心、或有冷塊攻心上氣、則五積散多取効。若無効、則正氣天香湯有大奇。虚者紫蘇和氣飲。」

小建中湯：「腹痛の症、五積散の症にして、汗あるものは小建中湯主之、是半井家の秘方也。」

三和散：「腹筋拘攣之間：因氣三和散，因寒湿五積散。」

③友松子：

蘇子降氣湯，分心氣飲：「脚氣、疝氣等之證、足冷者、五積散。

虚陽上攻、痰喘壅盛、足冷者、蘇子降氣湯。

心氣鬱結、不能升降、足冷者、分心氣飲。」

④浅井貞庵（1770~1829，60才）：

小青龍湯：「……裏ばかりの冷えるのは理中湯也。内外の冷えにて水氣あるなら小青龍也。

内外の冷えが冷えたなりで居るのは五積散也。」

⑤百々漢陰（1773~1839，67才）：

解急蜀椒湯、大建中湯、或は附子理中湯、附子粳米湯：「五積散：中寒、腹痛、一通りに用ゆ。

緩なるかたと知るべし、劇しきものは寒疝類にて方を撰び、解急蜀椒、大建中、

或は附子理中、附子粳米の類撰用すべし。」

## 五積散が著効した一例

症例：

○月 ○子、主婦（1967年2月11日生まれ、31歳、女性）

【主 訴】：月経痛、肥満、手掌と手指の発疹

【既往歴】：特記事項なし

【家族歴】：父母とも高血圧

【診断名】：月経困難症、肥満症、高血圧、汗疱（?）

【現病歴】：

①初経は11才。以降月経痛と月経前の下腹部の張りを自覚し、症状は徐々に増強。

現在鎮痛剤連用にて痛みをコントロールしている。

②肥満は4,5年前から徐々に増強となった。

③20才代より手指にひび割れが出来やすく、手掌手指とも多汗傾向、また全体皮が何度も剥けていた。

食欲旺盛、口渴なし、多飲なし、多汗傾向、寝汗なし

排尿一日5回、夜間尿なし、便秘傾向

【身体所見】：

身長：150cm、体重：68kg、体脂肪率：41%、血圧：160/108mmHg

一見堅太りタイプ

【血液学的所見】：

空腹時血糖：132mg/dl、他異常所見認めず

【漢方医学的所見】：

舌 診：湿、薄い白苔、齒痕（+）、やや暗紅

口 唇：上下とも絳

脈 診：沈、弱

腹 診：腹力 中等度

腹満（+）

胸脇苦満（+）；右側&gt;左側

小腹不仁（±）

その他：爪の変形

【漢方医学的診断】：

血積、痰積（水毒）、食積による実熱証の肥満（但し脈は実ではない）。

【臨床経過】：漢方初診'99年3月20日

初診時は、肥満治療が本人の第一希望であった為、脈（沈弱）は考慮せず、防風通聖散を処方。約9ヶ月後には、体重が5kg減少し、体脂肪率も最大時（43%）より9%減少した。月経困難症に対し、駆瘀血剤の桃仁、牡丹皮、紅花を加味し、月経痛は少しずつ軽減したが、時々鎮痛剤は使用していた。この間、手掌発疹の改善はそれほど見られなかった。

ところが9ヶ月後、手足の冷えと胃のもたれ感が出現した為、処方を再度検討し、五積散・大黃末と腸癰湯に転方した。その1ヶ月後、手足の冷えと月経痛はほとんど消失、大黃末を使用しなくても、便通良好となり、手掌発疹も軽快した。その後、同処方続行にて、体重、体脂肪率とも順調に軽減し、'99年7月には、体重61.5kg（6.5kg減）、体脂肪率32%（11%減）となった。血圧も110/120/70~80mmHgに安定した為、降圧剤中止となった。五積散と腸癰湯に変方後、月経痛は翌月より消失。以降一度も出現しなかった。手掌の発疹も増悪を認めず、爪の変形も軽快した。その後症状の再発は認めず'99.10.29終診となった。

【考察】：

肥満、或いは掌蹠膿疱症の治療に防風通聖散が奏功する報告は多いが、本症例は当初実熱証と診断し、防風通聖散を用い、9ヶ月後、減量に対する効果は確かにあった。

しかし、その伴随症状である月経困難症、汗疱(?)の改善はそれほど見られなかった。本症例は治療の過程、常に脈が沈弱ということに気を付け、その後冷えと胃のもたれ感が出現した為、防風通聖散の続行が困難と判断し、再検討した上、血積、痰積(水毒)、食積、寒積に対応できる五積散に変方後、予期以上の効果を認めた。ここで、「方証相對」の大切さを実感し、勉強になった。

【臨床経過一覽表】：

通院日	体重(kg)	体脂肪率(%)	漢方処方	加味、変方の理由及び主な身体変化	血圧(mmHg)	併用薬		
'98.03.20	68.0	41	防風通聖散7.5g	便秘改善。	160/108	メインテート(5)		
'98.04.03	68.4	42	煎じ 防風通聖散加防已, 厚朴,桃仁,牡丹皮 (食直前ゆっくり 飲用)	腹満と月経痛が強い為、 厚朴,桃仁,牡丹皮を加味。  加味後直ちに腹満が改善。	148/80			
'98.04.17	66.8	43			150/88			
'98.05.15	66.2	39			130/76			
'98.06.12	65.0	37	煎じ 防風通聖散加防已, 厚朴,桃仁,牡丹皮, 紅花 (食直前ゆっくり 飲用)	月経痛やや軽減。 更に紅花を加味。  鎮痛薬の使用は減少。 手掌発疹はやや軽快。  '98.12.18腹診上、胸脇苦満 が消失。	138/68	メインテート(5) ノルバスク(5)		
'98.07.10	65.2	35			142/88			
'98.07.31	63.4	34			130/78			
'98.08.28	63.6	33			126/82			
'98.09.18	64.0	34			140/88			
'98.10.23	63.2	36			120/78			
'98.11.20	63.0	36			122/60	メインテート(5)		
'98.12.18	62.6	34			120/76	ノルバスク(2.5)		
'99.01.22	62.0	35			五積散7.5g 腸癰湯4.0g 大黃末0.5g	足の冷え、胃のもたれ感が出現、軽減した月経痛やや増強にて、五積散に変方。  足冷及び下腿に大理石斑が見られた。	140/80	メインテート(5)
'99.02.19	63.2	35			五積散7.5g 腸癰湯4.0g	足の冷えと月経痛ほぼ消失。 手掌発疹消失。 便秘軽快。	128/82	降圧剤全て中止
'99.03.26	63.4	35	140/90					
'99.04.23	62.2	37	148/88					
'99.05.21	62.2	36	156/94					
'99.06.18	62.0	33	140/78					
'99.07.16	61.5	32	150/92					
'99.09.03	61.5	32	五積散5.0g 腸癰湯4.0g	五積散減量後も状態の悪化認めず。 治療終了。	152/92			
'99.10.01	61.9	33			158/94			
'99.10.29	62.7	33			138/88			

【今回用いた処方及び構成生薬分量】：

①防風通聖散料加減：（煎じ）

当帰2.0 黄芩2.0 桔梗2.0 麻黄3.0 白朮2.0  
 芍薬3.0 梔子1.5 甘草2.0 大黄1.5 生姜1.0  
 川芎2.0 荊芥1.5 滑石2.0 芒硝0.5  
 丹皮2.0 連翹1.5 石膏2.0  
 桃仁2.0 防風2.0 防已2.0  
 紅花2.0 薄荷1.5 厚朴3.0

②防風通聖散（ツムラ；エキス7.5g），1P=2.5g

当帰1.2 黄芩2.0 桔梗2.0 麻黄1.2 白朮2.0  
 芍薬1.2 梔子1.2 甘草2.0 大黄1.5 生姜0.5  
 川芎1.2 荊芥1.2 滑石3.0 芒硝0.7  
 連翹1.2 石膏2.0  
 防風1.2  
 薄荷1.2

③五積散（ツムラ；エキス7.5g），1P=2.5g

当帰2.0 桔梗1.0 麻黄1.0 蒼朮3.0 枳実1.0  
 芍薬1.0 甘草1.0 桂皮1.0 茯苓2.0 厚朴1.0  
 川芎1.0 陳皮2.0  
 白芷1.0 半夏2.0  
 大棗2.0  
 生姜1.0

④腸癰湯（コタロー；エキス6.0g），1P=2.0g

薏苡仁9.0 冬瓜子6.0 桃仁5.0 牡丹皮4.0

【五積散と防風通聖散の比較】：

		防風通聖散	五積散（ツムラ）
共通生薬	当帰、芍薬、川芎		
	桔梗、甘草、朮、麻黄、生姜		
相異生薬	清熱薬	黄芩、梔子 石膏、連翹	
	辛温解表薬	荊芥、防風	桂皮、白芷
	辛涼解表薬	薄荷	
	瀉下薬	大黄、芒硝	
	利水滲湿薬	滑石	茯苓
	芳香化湿薬		厚朴
	理気薬		陳皮、枳実
	化痰止咳薬		半夏
補気薬	大棗		

【処方解説】：

①出典条文：

太平惠民和劑局方：

卷之二 治傷寒附中暑

五積散：

調中順氣、除風冷、化痰飲。治脾胃宿冷、腹脇脹痛、胸膈停痰、嘔逆惡心、或外感風寒、內傷生冷、心腹痞悶、頭目昏痛、肩背拘急、肢體怠惰、寒熱往來、飲食不進、及婦人血氣不調、心腹撮痛、經候不勻、或閉不通、並宜服之。

陳橘皮去白、枳殼去，麩炒、麻黃去根，節 各陸兩，

白芍藥、川芎、當歸去蘆，洗、甘草炙，剉、茯苓去皮、半夏湯洗七次、

肉桂去粗皮、白芷 各參兩，厚朴去粗皮，薑製、乾薑炮 各肆兩，

桔梗去蘆頭 拾貳兩，蒼朮米泔浸，淨洗，去皮 貳拾肆兩。

右除肉桂、枳殼外別為粗末外、壹拾參味同為粗末、慢火炒令色轉、攤冷、次入肉桂、枳殼末令勻。

每服參錢、水壹盞半、入生薑參片、煎至壹中盞、去滓、稍熱服。

如冷氣奔衝、心、脇、臍、腹、脹滿刺痛、反胃嘔吐、泄痢清穀、及痲痺癢癢、膀胱小腸氣痛、即入煨生薑參片、鹽少許同煎。

如傷寒時疫、頭痛體疼、惡風發熱、項背強痛、入葱白參寸、豉七粒同煎。

若但覺惡寒、或身不甚熱、肢體拘急、或手足厥冷、即入炒茱萸七粒、鹽少許同煎。

如寒熱不調、欬嗽喘滿、入棗煎服。

婦人難產、入醋壹合同煎服之。並不拘時候。

②日本医師会医薬品カード：

●使用目標：

本方は体力中等度の人を中心に比較的幅広く用いられる。寒冷や湿気に侵されて、下腹部痛、腰痛、四肢の筋肉あるいは関節の痛みなどを訴える場合に用いる。この場合しばしば下半身の冷えと上半身ののぼせ、頭痛、項背のこり、悪寒、悪心、嘔吐などを伴うこともある。婦人では月経不順や月経困難などを伴うことが多い。

●適応症：

上記の使用目標に従って、次の諸疾患に適用される。

腰痛、下腹部痛、神経痛（とくに坐骨神経痛）、筋肉痛、関節痛

その他、慢性関節リウマチ、月経困難症、月経不順、感冒、胃腸炎、更年期障害などに用いられることがある。

●鑑別を要する主な処方：

当帰四逆加呉茱萸生姜湯、当帰芍薬散、桂枝加朮附湯、八味地黄丸

③五積散の加減方：

衆方規矩に記載された五積散の加減 (曲直瀬 道三)					
構成：蒼朮、桔梗、麻黄、枳殼、陳皮、厚朴、乾姜、當歸、川芎、芍藥、白芷、桂皮、半夏、茯苓、(生姜、葱白)；計十四味。					
		加 味	減味		
諸 症 状 に 対 す る 加 減	寒に犯される		煨乾姜		
	氣をはさむ；寒疝		呉茱萸		
	氣滯による腹筋のはり		青 皮		
	総身の疼み		乳香、没藥、細辛		
	風 痺		羌活、独活、防風		
	腰 痛		桃仁、茴香		
	手足のひきつり		檳榔子、木瓜、牛膝		
	咳 嗽		杏仁、桑白皮	○頭痛、臂痛、腹痛、腰痛、脚氣の痛風などに皆發熱ありて、足の冷る時は此の湯を與えて可なり。	
			杏仁、五味子		
	寒 濕 に 感 じ 風	腰痛、脾胃の氣がとじ		桃 仁	○寒氣、脾腎肝の三陰の經にとどこおりて、四肢節々の痛むに與えて、奇妙の効あり。
		腎經を傷り、腰痛俛仰できず		乾姜、桃仁	
		經絡にくぐり、脚膝の腫れ痛み		木 瓜、牛 膝 檳榔子、呉茱萸	
		臂膊痛、総身しびれ四肢骨節痛		羌活、独活、穿山甲	
	泄 瀉		肉豆蔻、白朮	枳殼	○腹痛久してやまず増も減もせず、寒に因る者には宜く治す。
疝 氣： 小腹より痛み、腰胯の下につらなり、心さき痛み額の上に汗出		延胡索		○風寒濕に感じて、臂膊痛み、或は総身しびれる者にこれを治す。	
足のむくみ		五加皮、大腹皮		○ころびて、身を打、或は人にたたかれて、血とどこおり、其の所冷え痛むには立どころに効をとる。	
熱		黄 芩		○冬月、腰たたず、上氣して面あかく、また腰より下冷ゆること氷の如く、顔火の如く熱し、背は寒をにくむにも亦た宜し。	
婦	月經の調節、産の催生		艾葉、醋	○婦人の身冷えて、經水來ざる者にも可なり。	
	月經時：身痛、手足のしびれ、頭痛、めまい		羌活、独活、牛膝 生姜、大棗		
	虚寒による赤白帶下		呉茱萸、香附子 呉茱萸、香附子、茴香		
人	淋 病		車前子、木通	○新産のあとに此藥を以て敗血を除て、新血を生すべし、寒熱の患もなきものには麻黄を去る。	
	難 産		麝香、肉桂		
	寒い時節の難産		附 子		
	死 胎		乾姜、附子		○手足の湿にてしびれるには烏藥順氣散を合す。

④ 大家らの記載：

◎ 龔廷賢の「古今醫鑑」の中に

「五積散……此方藥品氣味辛温、發表温中、開鬱行氣、殊有厥功、去寒濕之聖藥也。夫寒濕屬陰、燥熱屬陽、人之有病不過二者而已。善用藥者、以苦寒洩其陽、以辛熱散其陰、病之不愈者未之有也。故以防風通聖散為治燥熱之藥、以五積散為治寒濕之藥。」

更に「春夏は防風通聖散を用い、秋冬は五積散を用ゆ。」と云った。

◎ 岡本玄治の「玄治目附之書」の中に

「……此方は藥方五つ合たるに依て五尺散と名けたりと見えたり、亦兩目五つにつもると云心に見えたり、寒濕を克治也。大抵此方は寒濕を除き、九文は風濕を除き、通聖は風熱を去る也。……此方右にも注する五方を合してくみたと見えたり方、中にて藥味を吟味するに平胃散、二陳湯、麻黃湯、四物湯、今一方は桂枝湯也。平胃散は大抵濕氣之藥也、二陳湯は痰之藥也、麻黃湯は寒氣之藥也、四物湯は血藥なり。」

◎ 岡本一抱の「方意弁義」の中に

「……五積散と名付るは。入門に見えたる如く。五積を散ずると云意なり。五積とは。血、氣、痰、食、寒の五なり。此方中に。平胃散ある故に。食の滯るによし。四物湯の中を。地黄を去て用ゆる故に。血虚に宜し。二陳湯ある故に。痰によし。肉桂と乾姜とを組合する故に。寒に宜し。白芷、麻黃ある故に。氣に宜し。是にて五積散と名付く。」

◆ 以上の記載からまとめてみると、次のことが言える：

① 五積（五尺）散の名付の由来は

1. 五つの積（氣積、血積、痰積、寒積、食積）を散ずる。
2. 五つの藥方（平胃散、二陳湯、麻黃湯、四物湯、桂枝湯）より構成される。
3. 量目が五つのグループにつもる。

② 防風通聖散は燥熱／風熱を治する聖藥に対し、五積散は寒濕を治する聖藥である。

矢數道明に曰く「吾々の實際經驗上五積散と防風通聖散の合方が頻りに用いられるが、即ち二者の移行型とも云うべきものが、中年初老時の中風性體質者に可成りに多い。この二方の合方と云えば、その藥味の上より之を見る時は或は呆然自失する方があるかも知れない。然るに實際上その一方のみにては如何としても足りらざる移行型が頗る多く二者の合方がよく奏效する事實は否み難い處である。」

◆ また使用目標に対し、津田玄仙の記載が一番簡潔で、下記の通りとなる。

◎ 津田玄仙の「療治經驗筆記」の中に

「……此方を用ゆる目的は腰冷痛、腰股攣急、上熱下冷、小腹痛、此四症の目的に用ゆる也。

△腰股攣急は腰より股へかけて筋はるを云なり、右の四症は五積正面の目的なり。

△上熱下冷は足冷るを重にとるべし、上熱は有ても無くてもよし。

△腰冷痛は冷の字に心を付べし、苦熱するは効なし。

……

△疝氣腹痛攣急して、足冷るものに此方効あり。

△此方を用ゆる心得、凡そ諸病寒濕に中る病人が皆此方用てよしと知るべし、寒濕は外、露にうたれ、内、冷水に傷らるるの類、寒氣と濕氣と二つこそべからず。」

【肥満の治療に対する記載】：

花輪壽彦に曰く「防風通聖散と五積散とは表裏の処方であり、防風通聖散は陽性の肥満に、五積散は陰性の肥満（水分を体内に貯め込むタイプの冷え症・便秘・水分過剰摂取・下肢の浮腫）に使われる。」

【発疹の治療に対する記載】：

①宋、王碩の「易簡方」：

「……一方、治渾身瘡疥、膿水淋漓、經時不愈、去麻黄、加升麻、大黄、名升麻和氣飲、蓋瘡癬為患、多因内有所蘊、發在皮膚、若只外傳以藥、何由得愈、不若以此滌之。」  
「若寒濕之氣注下作瘡、瘡愈則毒氣入腹、為害不淺、此藥尤效、已上三證、若覺壅盛多熱、脾胃素壯者、則以敗毒飲、亦加大黄煎服。」

②曲直瀬道三の「衆方規矩」：

「小兒に痘、時節甚寒して起發しがたく、或は紅斑初て見ゆる者には肉桂、枳殻を除て、残る十三味をゆるき火にて炒さて、攤げさまして除きおきたる二味を入れ、生姜を加えて、水にて煎じて、熱服するときは貴膿をなす。」

③岡本玄冶の「玄冶方考」：

「小瘡以熱湯洗入裏、及風引而瘡跡成黒色、氣不快用之、能調血氣。」

④香月牛山の「牛山方考」：

「小兒痘疹、天時嚴寒にして、起發する事あたわざるに升麻、防風を加て奇効あり。」  
「腮鏡脱落するに木香、烏藥を加て有奇効。」

⑤津田玄仙の「百方口訣集」：

「痘疹寒凝難起發之間：熟料五積散 小兒痘疹、天時嚴寒、不能起發、或紅斑初見者、除桂、枳、外十三味慢火炒、令攤冷、入二味加生姜熱服、是熟料五積散也。」

⑥加藤謙斎の「医療手引草」の楊梅瘡門：

五積散：一切の瘡毒、脉沈細なるものに加減して用ゆ。

「當歸、川芎、白芍、蒼朮、厚朴、陳皮、茯苓、半夏、白芷、枳殻、桔梗 各一錢、乾姜、官桂 各五分、麻黄 八分、甘草 三分、右姜棗水煎。

○加減法麻黄を去り、酒炒の大黄を加う。

○遺毒骨うづきなどの、脉沈細、寒症には右の加減に加熟附子。

附子にて瘀血を温して、大黄にて消するようにしたもの也。されとも脉が洪大なれば、先防風通聖散か黄連解毒湯かを用て、脉を和けておいて、そうして五積散を用ゆ。されとも今はそれもいらず、あたまから五積散を用よ。

○遺毒にて、耳の聞えぬに熟附子、酒大黄、升麻を加、但し寒氣の時ならば、麻黄を入れもよし。

○目の悪くなるには、升麻、大黄ばかりの加減にてよし。されとも痼疾ならば、目にも附子を加う。

○鼻のそこね、そうなるものにも目の加味と同事也。總して楊梅瘡はどこでも風の吹きとおる処に出るものなり、それで耳、鼻、目三処に出たがるなり。

○總して此症強く寒えたるには、水と酒と等分にして、薬の煎じ水に用る。されともこれより生附子を加たがよし。

○大黄の製法、細に剉、酒に浸して蓋をして一宿して、日に乾し、さっと熬る。

○右の薬を用いて薫薬を兼用べし。」